★愛国心を武力で突破することはできない＝パドリーノ国防相の反論演説

ベネズエラのパドリーノ国防相は２月 19 日、各軍の司令官たちとともに記者会見し、トランプ大統領がおこなった演説に怒りをもって反発した。国防相は「米国は非愛国的なカイライ政府を押し付けることはできない。最初にわれわれの屍を踏み越えていかねばならない」と述べた。以下はその演説の前半部分の全訳。

我々は常に、国家を巡るすべての出来事、ベネズエラの独立と主権に対するあらゆる脅威に注意を払ってきた。ベネズエラ国軍の任務は、こうしたことを常に検討し、ベネズエラ大統領、軍の最高司令官に常に勧告を提案することだ。これまで我々が常に法律の範囲内で対応してきたように、常に人権を尊重して対応してきたように、ベネズエラ国民の意志を常に尊重してきたように、そして常に、我々の憲法に則ってきたように、あらゆる脅威にどう対応するのかということだ。

昨日、我々はアメリカ大統領ドナルド・トランプがフロリダ州で発した演説に耳を傾けた。我々は当然、その傲慢で誇示するような口調、その言葉の傲慢さに驚きを禁じ得なかった。それは、我々自身の法律、国民、諸機関があるここベネズエラで目に見えるテロ行為を犯した人物らを持ち上げて、テロを擁護する演説だった。治安機関のヘリコプターを奪い取った上、国家機関を射撃した。国家機関や児童施設に対して実弾を発砲した。何も気にせずにだ。武器を奪い取るために軍の施設に押し入りさえしたような人物だ。ドナルド・トランプ氏はこうした行為を擁護したわけで、我々は当然、驚きを禁じ得なかった。

その演説ではさまざまなことに言及されたが、中でも際立ったのは、社会主義を自らの主要な敵だと見なす主張、そして、世界に一様の考え方をさせようとする主張だ。討論も考え方の違いも存在しない。議論や論理は存在しない。支配し威圧する力を通じて、自らの唯一の考え方を世界に押し付けたがっている。ドナルド・トランプ氏がこの世界で、この地球上で狙っているのはそういうことだ。

ここベネズエラの我々には憲法というものがある。あなたたちは否定し無視するが、憲法があり、その憲法の最初の方の条項では政治的複数主義について定められている。エリート至上主義の理論ではない。多様な勢力のそれぞれを政治権力にするための参加の理論だ。政治権力になるに当たっては、憲法そのものが、それがどういう仕組みなのかを示している。

さまざまな事柄の中でドナルド・トランプ氏は、「人道支援」と言われるものについても語っている。そしてその過程で、国際世論とベネズエラの世論に、軍が国民に対峙するかのような印象を押し付けようとする。うそとごまかしが羅列されることとなる。政治権力を握ろ

うと、ベネズエラ国民に対抗して仕立て上げられる、心理的な宣伝キャンペーンのようなやり方だ。

しかし我々が目にしたものの中でも最も深刻で、我々軍隊、男女兵士らに直接関係することは、ドナルド・トランプ氏がこの機関（軍）を指揮できるかのように思っていることだ。ベネズエラ国軍の兵士に命令を発するなどというのは常軌を逸している。

我々はあそこで助言する政治顧問がドナルド・トランプ氏に対して指針を示すべきだと考えている。ベネズエラ軍の最高司令官になるためにはまず、生まれつきベネズエラ人でなければならないからだ。当地で生まれなければならない。ボリバルが生まれたこの地でだ。我々が血を流し戦いによって強くなったこの土地で生まれなければならない。そして生まれた後、ベネズエラで政治の道を歩むことだ。そしてベネズエラで政治の道を歩んだ後、選挙に出て、その上でベネズエラ国民が自由にその意志を示す選挙で多数票を得ることだ。アメリカでやっているような間接選挙でではなく、ここの直接選挙でだ。全国選挙管理委員会が定める方法と手続きに則った、直接・秘密の、総選挙でね。

つまりドナルド・トランプさん。あなたが自慢げにベネズエラ軍に命令するには、この指針に従わなければならないのだ。そして、あなたはどの要件も満たしていないので、ベネズエラに対抗するキャンペーンが、あなたがやってきたごまかしの羅列でも、心理キャンペーンでもなく、ベネズエラで政治権力を獲得するためのあらゆる熱意であるべきだということを世界に示すことが望まれる。それが現実だ。

ということで、あなたはアメリカでキャンペーンを展開すればいいし、フロリダ州でやりたいのなら、そこでやればいい。我々はここでもう選挙を実施した。国民は投票したし、諸機関はその役割を果たした。ニコラス・マドゥーロ・モロス氏を大統領にした。そして同氏を国民の投票の力で大統領にした後、ベネズエラの国軍は同氏を最高司令官として承認した。それは、ベネズエラ国民自身の意志に由来するものなので、根本的な承認だ。我々は同氏を最高司令官として承認した。つまりここにはニコラス・マドゥーロ・モロスという大統領、そして最高司令官がいるのだ。ベネズエラ軍に対してキャンペーンが展開したい者はこの指針に従ってもらわねばならない。同じことを、ここベネズエラで大統領になったかのように主張する人たちに対して申し上げる。当地に操り人形でひざまずいた、敗北的な、愛国心のない政府を押し付けることを目的に、男女軍人らの良識、愛国心を武力で突破することなどできない。そんなことは達成不可能だ。屍の上を通らなければならないことだろう。ここにいる我々の屍だ。

再び主張する。国民と国は落ち着いている。政府機関は機能しているし、国民は街頭におり、

働いて、自分たちの幸せをさらに育もうとしており、憲法に基づく役割に向き合う政府がある。軍としてのまた市民としての義務感をかつてなく意識しているベネズエラ国軍が存在する。軍には文民意識があるのだ

（11 分 22 秒まで、後半は次号）。